「大正８年頃から　冬期間の馬そりによる雑穀運搬」

＊『ところ文庫18　常呂町の昔話２』から抜粋・編集
明治31年に岐阜県から移住・入植した藤橋ワキさん・久保田末乃さん・内藤タメさんの会話をを編者／林不二夫さんがまとめたもの。会話には美濃弁が使われています。

（略）大正８年頃から冬に雑穀は、網走の久田商店に運びました。夜９時頃出て夜明けに着くようにして、日帰りし、一晩寝て次の日また出かけた。夜通し（朝まで）運んだ。冬中運んでいた。
上杉さんや新谷さんに売って運んだ分もある。
うちは年貢を雑穀でもらっていたので、正月に小作の人が来て、かど（外）に出して検査をしてもらって運んだ。皆で運んだ。久保田商店や白井商店に運んだ。馬そりに13-14俵がやっとだね。
木の枠を作ってね。そりで運んだ。それも市街まで前の晩に運んで、そう、青木旅館のところまで運んでおいて、次の朝早く馬に乗っていって積んで行った。寒かったのなんの、ひどかったよ。難儀したよ。
夜中にギイギイと音がして、ほらだれそれが出て行く、だれそれが出て行くと急いだ。ギイギイ音がする。音がすると競って出て行った。
寒くて寒くて皆が出て行くのを馬屋まで下駄はいて送りに行くと、ネルをかんかんに巻けるだけ巻いて行かなかったら顔も何も真っ白になって、霜柱が立って、出て行く馬の顔も体も真っ白だった。
馬そりで運ぶんだから大変さ。ひっくり返るやら、切り込むやら、往生こいた（苦労した）と、よう言っとんさった。
大正８年に私どこが家を建てた年に大水が乗ってエン麦も泥んこになったが買ってくれたので、網走まで運んどった。（略）